

比較文化紀行 自然環境保護：英国ナショナルトラストと南方熊楠の神社合祀反対運動

著者名(日)	浜田 一字
雑誌名	紀要
巻	54
ページ	17-32
発行年	2011-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1087/00002483/



比較文化紀行

自然環境保護―英国ナショナルトラストと

南方熊楠の神社合祀反対運動

浜田 一字

英国の産業革命と日本の明治近代化

一七二二年トマス・ニューカメン(Thomas Newcomen 1663-1729)が蒸気機関を発明して後約五十年間、もっぱら炭鉱の出水を汲みだす用途に終始していたが、ジェームス・ワット(James Watt 1736-1819)が他の多くの機械の駆動力への転用を思い至った一七六五年より、蒸気機関は一八〇二年リチャード・トレヴィシック(Richard Trevithick 1771-1833)の最初の蒸気機関車を経て、一八〇九年ジョージ・ステイブンソンのロケットと呼ばれた時速五六キロの同機関車の改良に至る。ロンドンに世界ではじめて地下鉄が開通したのが一八六三年、地下トンネルをこの蒸気機関車が石炭の煤煙まみれで走ったというから、乗客へのそれなりの防御策が施されていたはずである。

一方、維新の夜明けと共にどつと日本に押し寄せた西洋文明の近代化の波の最も象徴的なものがこの蒸気機関車で、一八七二年新橋―横浜間鉄道開業は、それに先立つアメリカのペリー提督率いる四

隻の軍艦、いわゆる黒船の来航一八五三年と相まって、蒸気機関の力強さを見せつけられるに至った。産業革命の到来を実感させられ、やがてこの革命が人類に未曾有の文明文化、大量生産、大量消費という画期的な生活の変化をもたらし、豊かさの享受を謳歌する社会の構築に至る。さらに一八八三年には鹿鳴館に日本初の電灯がともる。

このような洪水のように押し寄せる文明文化の恩恵に酔いしれる人々の生活は、当時世界で一番進歩していたといわれるイギリス、ロンドンに始まる。ここは蒸気機関と石炭エネルギーと大英帝国の植民地支配、アメリカの黒人奴隷による綿花栽培を利用した綿織物、木綿の東インド会社による交易を集約して一八五一年、世界に先駆けて万国博覧会を開催し、活気に満ちた都市であった。

マーク・ファレル著『英語の世界』では、イギリスに産業革命が起った要因として、蒸気機関の発明と燃料としての石炭の採掘が行われたこと、アメリカ植民地での奴隷による安価な綿花の栽培、木

綿の纖維産業が発達したこと、インドその他の大英帝国の海外植民地による世界市場を抱えていたことなどを挙げている。

しかしこのような烈しい文明の発展には当然人々の生活に及ぼす負の要素も生じるはずで、二〇世紀の初頭のロンドンを、パリ万博を見物してから訪れた夏目漱石は、日記に次のように記している。

倫敦ノ町ヲ散歩シテ試ミニ痰ヲ吐キテ見ヨ 真黒ナル塊リノ
出ルニ驚クベシ何百万ノ市民ハ此煤煙ト此塵埃ヲ吸收シテ毎日
彼等ノ肺臟ヲ染メツ、アルナリ我ナガラ鼻ヲカミ啖ラスルトキ
ハ氣ノヒケル程氣味悪キナリ

一九〇一年 一月四日 日記より

表をあるいて居ると真黒な奴が石炭を載せた車を駆って来た
其時に一寸疑問が生じた此男の顔は石炭層の下に存在して居る
のか又は石炭が此男の顔の上に積もって居るのか現今スコラス
チックフヒロソフィーを研究して居る人が若しあるならば何ひ度

一九〇一年 断片一二より

英国産業革命の結実ともいえる、当時世界最大の人口が集結して
いた大都市ロンドンの、大気汚染に始まる文明の発達の弊害、環境
破壊と健康被害の始まりを漱石は敏感に感じとっていたのである。
さらに即座に日英比較文化の視点を展開する。

日本人は創造力を欠ける国民なり維新前の日本人は只管支那

を模倣して喜びたり維新後の日本人は又專一に西洋を模倣せん
とするなり憐れなる日本人は專一に西洋人を模倣せんとして経
済の点に於て便利の点に於て又発作後に起る過去を慕ふの念
に於て遂に悉く西洋化する能はざるを知りぬ過去の日本人は悉
く西洋化する能はざるが為己を得ず日欧両者の衝突を避けんが
為め其衝突を和らげんが為め進んで之を渾融せんが為め苦慮し
つつあるなり

一九〇一年 断片八より

一方漱石とは同い年、大学予備門で同期であつたが中途退学して
一八八六年よりアメリカ、一八九二年よりイギリスに渡り、漱石と
入れ違いに一九〇〇年帰国の途に着くまで、十三年間海外にあつて、
その間博物学の勉強を重ね、科学誌『ネイチャー』に寄稿、大英博物
館勤務、孫文と交流するなど華々しい活躍をみせた南方熊楠(1867-
1954)の場合、東西の比較は明確である。

西洋人なにかというところローマのルクレシウスの断詩(土より進
化して生物を生ずとの)などを証とし、西洋人は古からえらいな
どいえど、そんな下らぬことは仏經中に山ほどありて少しもめ
ずらしからず。いわばダーウィンなどただ仏説のいいしことを
曹參然と画一にいいあらわせしのみなり。しかし、なにか日
本・支那人は実地の觀察がうすいとか、帰納法を知らぬとか言
えど、右の色似論ごときは、一々例を挙げたのみならず、およ
そという字にて概括したれば、帰納法なること勿論なり。しか

して西洋人の馬鹿どもは、インド辺の草の葉に似たる形の同色の虫や、蘭の花に同色同形のカマキリなどを見て、始めて驚き、このことに気が付きしなるに、九世紀の志那人は、ありふれたる鷹、兎、蛇、つちぐも等にて、かかる説を立てしは、実に觀察に富めりというべし。故に金栗如來は、化学などということとは十分東洋にもありしが、ただこれを広め伝うる法がわるかつたというなり。



1891年頃の南方熊楠

出典：フリー百科事典『ウィキペディア』
(Wikipedia)

ヴィクトリア時代の大英帝国の国力の繁栄を支えたイギリスの産業革命の弊害が、ロンドンという当時世界最大の都市に顕著に現われていたのを、同じく明治の日本の近代化を体験しつつ、二人の若き日本の留学生にもひしひしと感じ取られていた。二人の立場はそ

れぞれに、片や国費にて派遣され二年数か月に五度も下宿先を変えながら、書籍を買いあさって過ごして、しまいには体調をくずして神経症に陥ってはうはうの体で留学を切り上げ、片や大学予備門に満足せず、アメリカへ単身乗り込んで博物学の研究からロンドンへ、そして大英博物館に勤務しつつ、科学雑誌『ネイチャー』に論文を掲載し、東洋と西洋の文化の交流を果たして成果をあげ意気揚々と帰国した二人、漱石と熊楠、共通するのは文明の弊害に対する不安、特に熊楠の場合はナチュラリストとしての立場から、やがて自然保護運動への展開の炎の口火を点灯させての帰国であった。

ナショナル・トラストとオクタビア・ヒル女史の

オープン・スペース運動

産業革命の大都市における弊害をいち早く感じ取って、社会活動という形で展開させるに至る視点はオクタヴィア・ヒル(1838-1912)の、当時次第に増えつつあった労働者階級の人々の暮らしに安らぎを与える子供たちの遊び場と空地の確保、オープン・スペースの確保運動がきっかけとなった。一八六九年五月九日オクタヴィア・ヒルはダヴェンポート・ヒルにあてた手紙のなかで次のように書いている。

.....The trees are of course very small ; but the creepers helped us, and the playground never looked so pretty. Our new swings were put up ; and three people were entirely occupied with superintending them the whole time. Each child had a

definite time allowed ; and all others were kept out of the way ; no easy matter with children so eager and so unaccustomed to control. The little band acquitted itself admirably, considering how young it is yet ; it is an acquisition. We had numbers of games of course. The see-saw was crowded all the time. Two people took charge of it ; and it seemed about as much as they could manage. It was very touching to see the children, when they first saw me open the gate. Our tenants were to come in first ; and I had to pick them out from the dense mass of eager faces. Such impatience ! as if a few minutes were hours ! Such a break of light came over the face as I caught the eye of a tenant ; the “Mary, you may come,” or “Dickey, you next,” was entirely unnecessary to the child addressed, but was the signal for others to make way ; and thro’ such tiny avenues, or from under bigger girls’ skirts, the tiny creatures emerged to the wonderful place of flowers and the many welcoming friends. I was rather proud to see that I was usually guided by a neater dress or cleaner face to a tenant. Then followed the admission of a few children coming to classes, or members of the band or drill classes, but not tenants. And then the mass of children from the neighbourhood. Oh such a troop ! The grown up people crowded on any place from which they could see. I wished our wall had been moved, and the rails up, both for the extra space, and that more people might have seen. All

children had flowers, cake, and an orange on leaving. My conclusion is, the place is really getting into order.

I had the report from a surveyor on the houses for which we are in treaty. He says very naively, “It seems to me the houses are much out of repair, tho’ considered by the landlord in excellent condition for the class of inmates.” He says, too, the property in the neighbourhood is in excellent condition, and will let well. . . .

To Miss F. Davenport Hill. May 9th, 1869

(樹木はもうほとんど小さいです。でもつる植物のおかげで運動場は見たこともないほどきれいです。新しいアランコも設置されました。それに三人の方たちが常時管理してくださります。子供はめいめい限られた時間を与えられ、あとは離れて順番を待っています。慣れないで逸る子供たちをうまく管理するのは容易ではありません。真事に習得を果たした幼い集団、その幼さを考慮しても之は習得なのです。私たちはもちろんゲームもたくさんしました。シーソーはいつも混み合っていました。一人が、かかりきりでできるかぎりの管理を果たしていたようです。ゲートが開いて私を初めて見たときの子供たちの姿は実に感動的です。私たちの借家人たちが最初に入ることになっていました。わたしは熱心な顔の密集の中から彼らを選び出さなければなりません。なんとじれったいこと。まるで数分が数時間に思えたことか。私が借家人の一人と目が会ったとき、その顔になんと光が輝いたことか。「メアリー、あなたいらしゃ

い」とか、「ディキ―あなた次ね」、などと子供たちに話しかけるのは全く必要なのです。ただ譲る人に合図するだけ、小さな行列を通って、大きな女の子たちのスカートの下から、この小さな子たちはすばらしい花の地に、多くの出迎えの友たちのもとへ姿を現すのです。私は清潔な衣服を着たさっぱりした顔つきの者たちに案内されて、借家人に会うのが誇りに思っていました。それから数名の子供たちが、教室やもしくは楽隊や練習のクラスに入るのを許可されますが、借家人はだめです。それから近所の子供たちの集団が続きます。まあなんと大勢なこと。大人はどこか目の届く場所に群がっています。私は、仕切りも手すりもどこかほかの場所に撤去しておくべきだった、そうすればもっと多くの人たちが見られたでしょうに、と思いました。子どもたちは皆帰りに花とお菓子とオレンジをもらっていました。この地が本当に秩序だった地域に変貌したというのが私の結論です。

私は契約中の家について調査委員からの報告を受け取りました。彼は大層控え目に、「私にはとても修理可能な家とは思えません。入居者の階級を考慮した家主の配慮を入れてもです。」さらに彼が言うには近隣の資産は申し分のない状況で貸すには問題ないとのこと。貸出しを尊重して書類を一部お送りいただけますか。N・セニョール夫人に貸したいと思います。私は、地方では機会は改善されて計画はさらに実施されていくと思います。」

一八六九年五月九日 F・ダヴェンポート夫人宛



オクタヴィア・ヒル
出典：フリー百科事典『ウィキペディア』
(Wikipedia)

オクタヴィア・ヒルは銀行家の娘であったが、父の破産から、母のキャロラインとその父で医師のサウスウッド・スミス博士の財力に支えられて育った。祖父の主張から伝染病の要因の多くは、都市の人口密集と貧困衛生である故、人々の住居環境の大切さを知覚させられたこと、さらに美術評論家、社会評論家、オックスフォード大学美術教授のジョン・ラスキンとの交流から、芸術活動を通じてラスキンの出資によるオクタヴィアの不動産事業への参入が可能になっていったのである。

このオクタヴィア・ヒルの視点こそ、やがて都市に生活する労働者階級の集合住宅居住環境改善要求から、できるだけゆとりのある共有スペースへの確保を求める発想が、人々の共感と支持を広げていくことになる。産業革命は世界の人々の暮らしを変え、人類が体

験した未曾有の変革をもたらした。大量生産大量消費の時代の到来を実現すると同時に農業人口を、産業労働者を、一挙に都市部へ、工場へ流入させ、集合住宅に住む貧困労働者階級を増大させるに至ったのである。このような都市部の広がりと生活環境の改善をいち早く認識したオクタヴィア・ヒルのオープン・スペース運動は、やがてオクタヴィアが既に国民のための入会地を確保する運動、イギリスでは古来「入会権者」と呼ばれる、近隣に住む人たちに自由に立ち入って土地利用する権利が保証されていた土地があり、これを護る運動を展開していた弁護士ロバート・ハンター（1844～1913）たちの「入会地保存協会」に相談をすると共に、一八七五年新聞の寄稿欄を通して運動をアピールし、基金を募ったのである。

これはちょうど南方熊楠が神社社会記反対運動を展開する中で、まず一九〇九年九月地元の新聞『牟婁新報』に発表、次いで一九一二年雑誌『日本及日本人』四月号、『山岳』七年一月号『森林の濫伐と山川の荒廃』と、矢継ぎ早にメディア攻勢を展開したことと符合する。

潮水地方の景観が損なわれることを危惧したワーズワース（1770～1850）が、一八四四年にケンダル・ウインダミア間鉄道敷設に反対して『モーニング・ポスト』紙に寄稿したのも共通する。

ワーズワースの意志はウインダミアの教区牧師ハードウィック・ローンズリー（1851～1920）の「潮水地方を守る会」へと受け継がれ、やがて一八九五年オクタヴィア・ヒル、ロバート・ハンター、ハードウィック・ローンズリー三人による民間団体「歴史的な名勝地および自然保護のためのナショナル・トラスト」が創設された。前述のエドモンド・モリス編『オクタヴィア・ヒルの生涯』

（一九一三年）では次のようなヒルの手紙がみられる。

I suppose you do not happen to know any gentleman likely to do for, and accept, our National Trust secretaryship? I fear we want a great deal, and give next to nothing. Of course, it might grow, but then it might not. The work would be delightful to one who cared for it: all the good results of the Commons and Footpaths work, with little or no fighting. On the contrary, calling on the generous and good people. But then we want interest in the cause, and accurate habits of business. . . . Our want comes about in this way: Our Com. Pres. Sec. has resigned, and we have been able to promote to his post our young secretary, who has done such splendid work for our Kent and Surrey Footpath Committee and the National Trust, giving half his time to each. Now he will give all his time to commons, and gather under him our vigorous young committees with a real friendly relation and good grasp. . . . I wonder if you saw my letter about Tintagel in the papers. Last week we needed £84 to save that headland; to-day we need only £23, so I almost see it ours. Is it not delightful? I must set to work now about Alfreton, a much more difficult problem, and hampered by mistakes and delays before we touched the matter. Still, into a safe state it must be got. To Sydney Cockerell October 26th, 1896.

(私たちのナショナルトラストの書記職、どんな紳士でも尽してみたいようなものであることご存じないでしょうか？私たちは欲しがらばかりで与えることをほとんどしないのでは、と心配です。もちろんトラストは発展するでしょう。でもそのあと伸びないかもしれません。仕事は関心を持つている者にとつては喜ばしいものです。「共有地」や「遊歩道」の仕事はすべて順調な成果を挙げていて、問題はほとんど無いか、皆無です。これと反対なのが寛大で善良な人々への呼びかけです。私たちはその原因と仕事の正確な慣習に興味を求め、私たちの望みは次のようになります。私たちの委員、長老、秘書は退陣しました。そして私たちは彼のポストに若い秘書を昇格させることができました。彼はケントとサリーの遊歩道委員とナショナル・トラストに対して、それぞれ自分の時間の半分を割いて素晴らしい働きをしてくれました。これから彼は庶民のためにすべての時間を割いてくれるでしょうし、私たちの若い活動的な委員たちが、真に友好的な関係と良識をもって彼のもとに集まるでしょう。新聞でテインタゲルについて、私の手紙をご覧になったでしょうか。先週私たちはあの岬を救うために八四ポンド必要でした。今日はわずか二三ポンドで足りるようで、そこでは私たちのものと見えています。楽しくないですか。私はこれからアルフレストンについて取り掛かなければなりません。はるかに困難な問題です。私たちがこの事項に至るまでに誤解や遅延に妨げられました。でもやはり無難な状態に落ち着くはずですよ。

一八九六年十月二十六日 シドニー・コカレル宛 オクタヴィア・ヒル)

一八九五年にヒル、ローンズリー、ハンターたちによって創設されたナショナル・トラストの初期の活動の中で、中心となったものが湖水地方の自然環境保護活動であり、中でもクロスウエイトの教区牧師であったハードウィック・ローンズリーの活躍があった。一八八二年一六歳で初めて湖水地方に滞在してローンズリーと親交を結び、後の童話作家、挿絵画家、農民、牧羊家としての活躍の根柢を湖水地方に置いたビアトリクス・ポッターは、ローンズリーの妻に宛てた書簡で次のように書いている。

There was no letter to Dorothy Wordsworth amongst my father's collection. The only autograph letter of William Wordsworth's is addressed to John Gardner Esq. complaining about Messrs Longman the publisher. It is dated May 19th 1830; a long letter, a little bit sententious, but characteristic. If you think it is likely to be interesting I will gladly lend it?

Perhaps the letter to Dorothy may have been on approval. My father bought autographs from Walter Daniell's Mortimer St. and Tregaskis, Holborn; both reputable firms. He did not always buy. I remember a discussion and doubt about a signature - I thought it was Dr Johnson's, but very likely my memory is at fault and it might be the Wordsworth letter - the

one sent to Canon Rawnsley for his opinion. I am afraid if HDR's[Hardwicke Rawnsley] reply is still existent [sic] I could not read it; and I cannot read much of R P's [Rupert Potter]

I sometimes ponder over what he would say of recent developments - changes for good, for evil, and for doubtful good. It is to the good that there should be this new widespread interest in the overworked new word "amenity"; but personally I mistrust and definitely dislike some recent feelers towards a new policy.

The Canon's original aim for complete preservation of as much property as possible by acquisition was the right one for the Lake district.

(私の父のコレクションの中にはドロシー・ワーズワースに宛てた手紙はありませんでした。ウィリアム・ワーズワースの自筆の手紙はジョン・ガードナー宛ての出版社ロングマンへの苦情だけです。一八三〇年五月一九日付の長い手紙でやや気取った、でも個性的なものです。もし興味があれば喜んでお貸しいたします。

おそらくドロシー宛の手紙は点検売買されてしまっているでしょうから。私の父は自筆のものをダニエル・モーターとトレガス・ホルボーンから購入しました。二社とも信頼できる会社です。彼はいつも購入していたわけではありません。私は署名について疑問と論議があったのを覚えています。ジョン

ソン博士のものであったとおもうのですが、でも私の記憶違いかもしれません。たしかワーズワースの手紙でキャンノン・ローンズリー宛に彼の意見を求めたものです。もしハードウィック・ローンズリーの返事が存在したとしても読むことは不可能だったでしょう。ルバート・ポッター(ヴァトリックスの祖父)のものもあまり読むことができません。

わたしは時々最近のこの発展を、良いほうか、悪いほうか、もしくは疑わしいほうか、彼は何というだろうかと考えます。過度に使いすぎる「快適生活」という言葉の中に新たな広がりを見せる関心は良い方向でしょう。でも個人的には新しい政策に向かうこの頃感覚は疑わしいし、はつきり言って嫌いです。

キャンノンの本来の意図は、入手可能な資産をできる限り完全な状態で保全することで湖水地方はその正当なものでした。ビ
アトリックス・ヒールリスより心をこめて 一九三四年十月二十一
日)

こうして産業革命によって生じた都市部への人口の集中は、多くのひずみを生み、なんとかして人間らしい生活を取り戻そうとの運動は、風光明媚な湖水地方の自然保護運動と結びついて、社会慈善家と牧師、弁護士たちによる世界でもまれな民間団体の活動が展開されることになった。

ビアトリックス・ポッターと南方熊楠

ビアトリックス・ポッター (1866-1943) と南方熊楠 (1867-1941) は、

ほぼ同じ時代を生きた博物学者であり、童話や民話の世界に数多くの著作を残し、そして何よりも自然を愛し、自然保護の運動に活躍した自由人であった。ポッターがキノコの生態に惹かれ論文を書いていけば、熊楠は粘菌の研究に明け暮れ、片やピーターラビットというウサギの童話で世界に知られ、片や十二支考の著作で民話伝説の動物の世界を描き、また片や英国湖水地方の自然保護活動でナショナル・トラスト運動を展開すれば、片や和歌山県吉野熊野の地で、世界遺産熊野古道に繋がる神社合祀反対運動を展開している。まず博物学者としての両者の共通点であるが、それは菌類、隠花植物キノコの研究から始まっている。一八九七年一月十二日ポッターのチャールズ・マッキントッシュあての手紙には次のように書いている。

To Charles McIntosh 2, Bolton Gardens, London, S.W. Jan 12th 97

Do you think you could get me a fungus called *Corticium amorphum*? It grows on fir bark and looks at first like *Lachnea calycina*, but afterwards sticky like *Dacrymyces*.

Also I should be very much obliged if you could give me any information about *Merulius corium*. You told me some time since that you had not found it at Dunkeld with properly developed spore. Do you mean every season, or only in unfavorable seasons? Have you noticed the same thing with any other fungus? For instance *Chlorosplenium aeruginosum*?

I am doing some curious work with fungus spore, trying to draw up a paper with the assistance of my uncle Sir H. Roscoe.

I have found a fungus very like *A. velutipes* which Sir Henry thinks is either a mixture or a new sort. There is no harm in giving an opinion, or the result of observation; we find some people make theories out of dried specimens without the least experience of the way things grow. If you find *Corticium* would you please wrap it up as soon as found, to keep the spore separate. If you take any interest in physiology I should be amused to send a copy later on, we have got into contradictions at Kew & Br. Museum already, but I think my uncle is a good judge. Do you know anything about lichens? Beatrice Potter

(*Corticium amorphum* とするキノコを手に入れたのです。キノコの樹皮に生息し、初めは *Lachnea calycina* のように見えますが、しばらくが *Dacrymyces* のように粘着性を帯びてきます。)

それから *Merulius corium* についてなにか情報を教えていただければ幸いです。あれ以来しばらくの間ダンケルドでは充分に発達した胞子は見ることがないとおっしゃっていましたね。それは四季を通してという意味ですか、それとも適応しない季節に限ってという意味でしょう。他のキノコでも同じようなか。例えば *Chlorosplenium aeruginosum* など。キノコの胞子に関して興味ある研究をいつか。私の叔父の H.

ロスコエ卿の助力を得て論文にまとめようとしています。

私は *A. velutipes* によく似たキノコを見つけました。これをヘンリー卿は混合か新種と思っています。説を述べるのは差し支えありません。それが単なる説なのか、それとも観察の結果であるかを明らかにすれば。乾いた標本から成長する様子を全く体験せずに説を唱える人たちを知っています。もし *Corticium* を見つけたら、見つけ次第胞子を分離して包装して下さい。生理学に興味をお持ちでしたら、のちに一部お送りするのを楽しみにしています。すでにキューガーデンと大英博物館では対立しています。叔父が判定してくれると思います。苔についても何かご存知でしょうか。）

この後ポッターはキノコの論文を学会に提出するものの、当時の学界は女性の出席を認めなかったため発表はならず、研究を断念



ビクトリア・ポッター

出典：フリー百科事典『ウィキペディア』
(Wikipedia)

するに至る。

ポッターがこの手紙を書いた日、同じロンドンで連日この大英博物館に勤務していた熊楠はその日の日記に

一月十二日 火 曇 夜七時頃より汽車にて田之助氏と其宅に至り、予カレイ一匹カイ飯い酒のむ。同氏妻もあり、色々しゃべくる。十一時になり歩いて帰る。氏の宅はキューとハンマー・スミスの間なり。

としたためている。そして一九〇三年イギリスの科学雑誌『ネイチャー』七月三十日付には「ホオベニタケの分布(Distribution of *Calostoma*)」と題する熊楠の次の文が掲載されている。

In December, 1901, I found in a pit near Port Katsura, a few miles off this place, a species of *Calostoma* in abundance, and this year I see the same fungus now and then occurring here. I send you some specimens of it herewith, in the hope that some mycologist of your acquaintance may determine it in my behalf. Of all the species given in Mr. Masee's monograph of the genus in the *Annals of Botany*, vol.ii, 1888, it seems most near *C. Ravenelii*, Mass.

If my memory deceives me not, Mr. Masee, in the same paper, divided the genus *Calostoma* into two groups, the so-called eastern group, growing in Asia and the adjacent

islands, with globos spores, and the western group, the habitats of which are America and Australia, with elliptical spores. Now the Japanese species in question has its spores oblong-elliptical, which fact would seem to necessitate such a naming of the groups as eastern and western to be modified more or less.

Mount Nachi, Kii, Japan, June 5

(一九〇一年 十二月に私は当地より数マイル離れた勝浦(那智勝浦)港近くの窪地でホオベニタケの族種を数多く目にしました。今年はこの種のキノコを時々見かけました。ここにその標本を同封しますのでお知らせの菌類学者に判断していただければ幸いです。一八八八年の『植物学』第二巻におけるマシー氏の分類の研究のすべての種の中では、C. Raveneliiに最も近いと思われます。

もし私の記憶に間違いがなければ、マシー氏は同じ論考の中でホオベニタケの種類を二つのグループに分けて、いわゆる東洋グループ、アジア及びその近隣の島々に生息する球状胞子を持つたものと、西洋グループ、アメリカやオーストラリアを生息地とする楕円の胞子を持つものに分類されておりますが、今、日本の問題の品種が楕円の胞子を持っていれば、このことは西洋東洋の分類のグループのネイミングに多少とも変更の必要あると思われる。

日本 紀伊那智山 六月五日 南方熊楠

一方博物学者熊楠の動物に対する民族神話、信仰、伝説に対する

学識、研究は膨大なもので、その代表に「十二支考」がある。「兎に関する民族と伝説」では次のような記載がある。

西暦紀元六十二年、駐英ローマ兵士がイケニ種の寡后ボアジケアを打ち、その二女を強姦せしよりボアジケア兵を挙げた時、后まず懷より兎を出し、その動作を見て必勝と卜定め、臣下みなそのつもりで勇み立つてたちまちローマ方七万人を鏖殺したが、ついに兵敗れて後はみずから毒を仰いで死んだ。これ古ブリトン人が兎を族霊として卜占に用いたのだ、とゴムは論じた。ただしかの後の当の敵たるローマ人また兎を卜に用い食用として殺さなんだ。

南方熊楠選集 第一卷十二支考I 平凡社

さらに鼠に関する論考では次のようなエピソードを挙げている。

ジスレリの『文海奇観』に、禁獄された人が弦を鼓すること数日にして、鼠と蜘蛛がおびただしく出で来たり、その人を囲んで聴きおり、さて弾じ止むとおのおの退いた。さて毎度弾ずるごとに大入りゆえ、獄吏に請うて猫を隠しおき、音楽で鼠を集めて夢中になって感心しおるところを掩殺させた、とある。鼠や蜘蛛がそれほど音楽を好むかは知らぬが、列子やダーウインが言い、米国のトロローが実試した通り、もと諸動物は害心なき人を懼れず、おいおい慣れ近づき遊ぶ。そのうちに物が心なくしてすることも、目が動けば酒食を得るとて呪し、燈に丁字頭

が立つと錢を儲けるとて拝し、鵲が噪げば行人至るとて餌をやり、蜘蛛が集まれば百事喜ぶとてこれを放つ。瑞は宝なり、信なり。天寶をもつて信となし、人の徳に応ず。故に瑞応と云う。天命なければ宝信なし、力をもつて取るべからざるなり、と陸威が焚燬に語った通り(西京雜記 三)、おのれの力を量らず、ひたすら僥倖をが人情だ。

【十二支考】鼠に関する民族と信念

人の生活に密接にかかわってきた動物との人情の機微について、ボターの場合もより密接な感慨が見られる。同じく鼠について一九二〇年ワイアット婦人に宛てた手紙の中で次のように書いている。

I once had a mouse which must have been cross bred, but I can't remember where I got it. It was all brown except a white mark down its face. It was ferociously tame. I used to let it run about in the evenings & when I wanted to catch it I flapped a pocket handkerchief in the middle of the room-or rooms-when it would come out & fight, leaping at the handkerchief.

I think I remember it was that same mouse which got into trouble with the authorities by biting out a circular hole in a sheet on my bed! I had many mouse friends in my youth. I was always catching & taming mice - the common wild ones are far more intelligent & amusing than the fancy variety. But

strange to say mine never bred, in spite of having much liberty & comfortable nest boxes. White mice are too prolific; but "Hunca Munca" firmly refused to have any family. I have had several female brown mice but never a nest of young ones from tamed brown parents.

Yrs sincerely Beatrix Heelis Nov. 27. 20

(私はかつて鼠を飼っていました。クロスベッドの中に違いないと思うのですが、何処からそれが入り込んだのか思い出せません。顔に白い斑点がある他全身が褐色でした。ひどく馴れたものでした。私は夕方になるとそれを走らせ、捕まえたくないと部屋中央でハンカチをはためかせ、あるいは部屋でそうするとそれが出てきて、張り合ったり飛び掛ったりしたものでした。

私のベッドのシーツを齧って丸い穴をあけて、大家さんとトラブルに巻き込まれたのも同じ鼠だったと思います。若い頃私には鼠の友達がたくさんいました。私はいつも鼠を捕まえて飼いにらしていました。よく見かける野性のものは、変り種の変種のものより利口で楽しませてくれます。でも言うのも変ですが私のものは、はるかに自由で快適な巣箱を与えられていたにもかかわらず、一度も繁殖はしませんでした。白い鼠は多産ですが、「フンカムンカ」は家族を持つことを頑なに拒みました。私は雌の茶の鼠を何匹か飼っていましたが、慣れた茶色の親からは幼子の巣は一度もありませんでした。ビアトリックス・ヒースより心をなめ

一九二〇年十一月二十七日

ボッターも熊楠も共に博物学者として動植物の観察から自然保護の視点を育み、さらに両者ともナショナル・トラストが謳う「自然及び歴史的名勝地の保存」の趣旨の活動を展開する。熊楠は次のように訴える。

古書の保存よりもずっと大事なのが古跡名勝天然記念物の保存で、天然記念物のことはしばらく措き、古跡と名勝が国民の感化に口筆の企て及ばざる力を有するは、玄奘の「西域記」に、「妙理は幽玄にして、言談の究むるところにあらず。聖迹は昭著にして、足趾相尋ぬべし」と言った通りだ。和歌山県会議員毛利清雅氏は、故マクス・ミュラーが瑜珈秘密の教旨を究めんため、その教師を土宣法竜僧正に求められし時、その選に擬せられた人で、予と喧嘩もすればまた和睦もするが、熊野の名勝古跡天然記念物が幾分横暴な官公吏の手を免れて現存するは、この人勧誘の力多きに居る。

南方熊楠全集第五巻 古書保存と和歌山城の破壊

同じくボッターにも湖水地方の名勝アリッジハウスの保存の動きを展開、一九二六年二月十三日ハマー氏に宛てた手紙で次のように願っている。

It seems possible that the property on the beck side of Rydal

Road in Ambleside may be on sale later on, including the little old Bridge house perched on steps over the water. There is so little left of old Ambleside that the bridge house attracts more curiosity from visitors than it altogether deserves; it is not of much merit as architecture. Its preservation would certainly appeal to the town's people. Does it interest you at all? If so - it might be wise to make some inquiry *before* the sale planning matures. The back part of the site, over the beck is an untidy garage yard & motor builders premises; and a market garden future on; not a very fine use of a valuable town site. And so unattractive a background to the Bridge house as at present existing that I don't think its position & appearance would be any worse even if it were preserved in isolation - so to speak - in the foreground of a building scheme. The chances are that the site would be bought for a garage if it comes up for sale. I understand that the bridge house lets with 10 foot on either side; as a shoe makers shop. The beck is uninteresting; it is kept clean, according to bye laws, but it is the sort of stream that suggests pots & kettles & a rubbish dump. If some part of it were covered in, it would not matter - outside the 10 foot. I could not get a postcard this morning, but you probably remember the little house - this sort of thing - from memory. Not beautiful; but it will be looked for, & missed, if it goes down. What usually happens in these cases is that the whole is

sold, and a bit is tried for at great cost of buying back afterwards. The sentiment of the town would be for preserving it.

I remain yrs sincerely H.B.Heelis

(アムブルサイドのライダー道路の小川側にある資産は、後に売りに出される可能性があり、その中に水上の階段に止まっている古いブリッジハウスが含まれています。古いアムブルサイドには残っているものが少ないため、ブリッジハウスは本来の価値以上に訪問者の好奇心を惹き付けると思われます。建築物としての利点はあまりないけど、その保存は町の人たちにアピールすることは間違いありません。あなたもそれに惹かれるでしょう？もしそうならば売り出しの話が熟す前に調べておいたほうが良いと思われれます。現地の裏側、小川の間は汚いガレージと車両業者の敷地です。その先は市場の庭で貴重な町の敷地としてあまり有効な利用は見込めません。ブリッジハウスの背景は現在のところあまり魅力的ではありませんから、その位置と外見は、もし個別に保護されなければいわゆる建物の事業計画の重要性において悪化すると申せましょう。もし売りに出されれば、あの敷地はガレージとして買われてしまう可能性はあります。ブリッジハウスの両側十フィートは靴屋として賃貸であることは了解です。小川は興味ありません。法的にきれいに保つべきですが、やかんや湯のみ、ゴミ捨てを思わせる類の小川です。もしそのいくらかが覆われていたら、十フィート外であれば問題はありません。今朝は、はがき受け取れませんが、

おそらくあの小さな家は、この類のものは覚えておられるでしょう。決して美しくはありませんが、探しても通り過ぎて見過ごされるでしょう。このような場合よくあることですが、全体として売られてしまった後、部分を後で買い戻そうとすると莫大な費用がかかります。町の人の心情としては保存に賛成です。

ヘレン・ビアトリクス・ヒーリスより心をこめて

自然保護及び史跡名勝の保存の立場より、熊楠の神社合祀反対運動がある。明治三十九(一九〇六)年近代化を推進しようとする明治政府による、全国の神社を併合して一村一社とする神社合祀令は全国に波紋を広げたが、特に森林資源を有する紀伊半島、熊野三山を控えた和歌山は、古くからの古木が神社境内を覆って鬱蒼とした景観を誇っている。それが俄かに伐採の危機をむかえることになった。これには、森林資源の払い下げで一儲けを企む利権者が横行し、漁るものたちが続出した。熊楠はさっそくこの動きに反対し、「当県植物流乱の件につき、小生は、これを機会として、植物のみならず、史跡、名所、またことに風俗、里伝等の保存、分けては愛郷心より推して愛国心を堅固にすることにまで及ぼせる長き意見書を作り」と、抗議の姿勢をあらわにする。「諸神社および神社趾の乱潰日々挙行せられおり(県郡当局者はこれを神社整理と称うれども、実は風儀破壊、神社不整理を行なうものなり)」として、さらに豊富な留学の経験を踏まえ、グローバルな視点を展開している。

例せば『万葉集』に名高き白崎ごとき、ドヴァーの白亜崖にも比すべき壯観なるを、全然爆裂破碎せしめ、同集に見えたる出立ち松原も、小学校建築用材と称して、村民樹幹に抱きついて哭くを、もぎ離して切り尽さしめ、炎天に蔭なく、魚類、浜に近づかざるに及び、大騒ぎすれども及ばず。ドイツなどには、勝地の電線を地下に架せしめおるに、近く電気鉄道を和歌浦絶景の所に串かんとす。三年前出でたるハヴロク・エリスの説に、古ギリシャ・ローマには、天然勝景と神祇とを連係すること厚かりしも、耶蘇教入りて偏執の極、在来の宗教を全滅せしめしより、天然風致を賞すること大いに衰う、その後古学復興するに及び、この趣味また起こる由を記せるを見たり。わが邦民氣質涵養の要素たる文学が、景勝古跡と離るべからざる縁あるは知れきつたることにて、その景勝古跡の多くは、神社と密接の關係あり。例せば、玉津島のごとき、祭神明光浦靈にて、衣通姫を従記せる由、『神社録』に見え、全く風景を神と齎けるなり。

南方熊楠 「神社合祀反対意見」『日本及日本人』一九一二年

この記述の中で熊楠は、一八八七年より一九〇〇年まで十三年に及ぶ海外滞在経験より取得した西欧の情報を存分に引き合いに出して、比較文化の主張を展開している。この記述で注目は、自然風景を神と同一化して神社と天然景勝を説いている点、ワーズワースやエマソンに共通する自然信仰、自然は神の意思の表れとみるトランセンデンタリズムと共鳴するものがある。さらに同趣意書の中で次

のように主張する。

愛郷心は愛国心の根本なり。英國学士會員バサー氏いわく、人民を土地に安住せしむるには、その土地の由緒、來歴を知悉せしむるを要す、と。氏は、近日野外博物館を諸村に設けんと首唱す。名前は大層なれど、実はわが神林ある神社のごときものなり。この人二十年ばかり前本邦に來たり、神林が土地の由緒と天然記念品をを保存するに大功あるを感じ、予に語られしことあり。外国にてようやく氣がつき創設せんとする物を、わが邦では滅却奨励とは狂氣じみたことなり。われらが祖先に濟まぬのみならず、恥ずかしくて外人に面を合やすこともできぬなり。古來神社はみな土地と關係あり、合祀しおわればすなわち土地と關係なき無意味のものとなる。人民が參拝せぬもつともなり。紀州人は多く古來海外に出稼ぎをなし、国元へ送金するに必ずその一部分を産土神に献ぜんことを托し、あるいは異邦珍奇の物を献じ、故郷慕うの意を表すなど聞くも、心の清々しきを覚ゆるほどなり。

一九一八年(大正七年)三月二日 帝國議會は神社合祀令廢止を決議する。南方熊楠の視点は常に広く世界的な視野から自然や環境、歴史的名勝地の保護を訴えており、これが日英の比較文化の共通の視点、ナショナル・トラストの精神を反映して、両国とも人間社会の形成の根源である環境保護の主張では共通して、国民的支持を得る結果に至る。二〇〇四年熊野古道は世界遺産として登録された。

関係事項年譜

- 一八四四年 ウィリアム・ワーズワース『モーニング・ポスト』紙上にて湖水地方のケンダル、ウィグミア間鉄道敷設反対表明
- 一八六六年 オクタヴィア・ヒル借家Freshwater Place購入、少女のための遊び場造成
- 一八八二年 ビアトリクス・ポッター、ハードウィックローンズリー湖水地方で出会った。
- 一八八四年 漱石、熊楠、大学予備門入学
- 一八八六年 熊楠 大学予備門退学 米国遊学
- 一八九二年 熊楠 米国よりロンドンに渡英
- 一八九五年 オクタヴィア・ヒル、ローンズリー牧師、サー・ロバート・ハンターと共にナショナル・トラスト創設
- 一八九七年 ビアトリクス・ポッター、キノコの研究論文、学会にて代読される
- 一九〇〇年 九月一日、熊楠リバプールより丹波丸にて帰国
十月二八日 漱石 パリ万博よりロンドン渡英
十二月 ポッター『ビーターラビット』出版
- 一九〇一年 明治政府 西園寺内閣神社合祀令発布
- 一九〇九年 熊楠 神社合祀反対運動開始
- 一九一四年 熊楠『十二支考』雑誌『太陽』連載開始
- 一九一八年 ポッター『まちなぜみジョニーのおはなし』
三月二日 帝国議会「神社合祀令」廃止決議
- 一九四一年 熊楠 七五歳 死去

一九四三年 ポッター 七七歳 死去
二〇〇四年 熊野古道世界遺産に認定

参考文献

- Mark Farrell *The World of English* Longman 1995
- C. Edmund Mauriceed *Life of Octavia Hill* Macmillan 1913
- Judy Taylor ed. *Beatrix Potter's Letters* Frederick Warne 1989
- Judy Taylor ed. *The Journals of Beatrix Potter* Frederick Wane 1966
- 『漱石全集』第十九巻 岩波書店 一九五七
- 『南方熊楠全集』平凡社 一九七一
- グレーム・マーフイ著 四元忠博訳『ナショナル・トラストの誕生』緑風出版 一九九二
- E・モバリー・ベル著 平 弘明・松本 茂訳『英国住宅物語』日本経済評論社 二〇〇一
- 平野威馬雄『大博物学者―南方熊楠の生涯―』リプロポート 一九八二